衛生学教室

当時の教室員は大倉玄一教授、福田秀信助教授、内田信久助教授、其の外に研究補助員二名（氏名不詳）雇の木下大吉氏であつた。

被爆時の状況

大倉教授は教授室、内田助教授は第五研究室で被爆。遺体は夫々確認される。

福田助教授は医専講義室で被爆死。他の教室員も教室内で爆死。

故大倉教授略歴

正四位勲三等、医学博士　衛生学教授

明治二十六年十一月一日岡山県に生る
大正九年三月九州帝国大学医学部卒業
大正十一年六月同大学助手に任ぜられ衛生学を専攻す
大正十三年十二月同大学助教授に任ぜらる
昭和六年五月衛生学研究のため欧米に留学
同　九年十二月帰朝す
昭和九年六月十一日長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十七年十月陞叙高等官一等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾の爆発に遭い爆死耘に殉ず

主なる研究題目

肺炎双球菌の菌型及び溶血素に関する研究

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	大倉玄一
助教授	福田秀信
〃	内田信久
雇	木下大吉

大倉教授とマウスと葉巻

永田友諫

大倉玄一教授が衛生学教授として九大から赴任されたのは昭和九年の夏。教授室から一歩も出られないで読書。そして片時も口辺から葉巻を離されぬ。通学は愛国タクシー。大層ぜい沢で気取つた様にも見えたのであるが、その実電車通学ではいやでも人に会う。会えばモノも云わずばなるまい。――面倒だと云う処らしかつた。この流儀を教室でも押し通されて研究事項以外は一切合切話題にならぬ。だからこちらから話をもちこまぬ限り幾日も顔も合せぬと云う事になつた。これは一面教室員にとり研究の自由が与えられると云う事にもなつたのである。教室員は少いし研究費に缺事く事はなかつた。処で一つだけどうしてもフに落ちない事があつた。訳の分らぬ事を申される先生では絶対に無いのでこの一件だけは今でも忘れない。と云うのは福田講師、永山、茅野、それに

私の四名が肺炎双球菌の仕事を与えられたのであるが、これにマウスを使用するに就いて節約を非常にやかましく申される。肺炎菌とマウスは切つても切れぬ間柄でマウス無しではこの研究はやれない。殊に疫学的方面を受けもたされた私にとつて打撃が大きい。当時マウス一匹十五銭。千匹使つた処で百五十円にすぎぬ。なぜだろう？四人が鳩首頭をヒネつて考えても分らない。マウスに代用出来る方法と云うものは絶対に無い。無いなら仕様あるまい！結論は茲に来ざるを得ず、いるだけは使うさ！と云う事になつて実験を開始した私は、たちまち二、三百匹のマウスを殺した。動物屋の請求書でこれを知つた大倉教授、本当に眼の色を変えて雷を私の頭上に落された。又々鳩首評定、なぜだろう？疫学方面の仕事は止めよと云う事に外ならぬ。処で教授にその考えは無いのである。絶対絶命。マウスに代る肺炎双球菌の分離方法に就いて真剣に考え寝食を忘れて実験に沒頭した。

二ヶ月にして一つの方法を得た。マウス通過法では三日目に肺炎菌の純培養が得られるのであるが、これでやると一昼夜で血液寒天平板に殆ど純培養状に肺炎菌が生えて来る。可検材料としては唾液が最も厄介。と云うのは口腔内に無数の雑菌が居るので、これから肺炎双球菌だけを選択的に一挙に純培養状に検出出来ると云う事は誰が考えてみても眉ツバもの。それで数十枚のプラッテを教授室の隣の部屋まで運んで「先生見て下さい！」。これを何十回となく繰りかえしたのであつた。確実に出さえしたらよいのであつて純培養状に証明されなくてもかまわぬのであるが「純培養状に出る」と云うこの一点に何ら故意の作為が無い事を信じて貰うためには斯うするしか無かつたのである。これで難関突破。山里小学校児童の唾液一五〇〇個から一二〇〇株（八〇％）の肺炎双球菌を分離し、ロックフェラー研究所から貰つた血清で凝集反応をやつて尽くこれを型別したのであつた。マウス通過法では健康人唾液から大約五〇％に証明する。この差三〇％の追求で更に面白い事になつたのであるが、その頃にはマウスをいく分使つてもお叱りを受けなかつた。マウスと称する可憐なる小動物に向けられた大倉教授の片意地から研究の新分野が拓けたのであつた。戦争も大分あやしくなつた頃、教授室に先生をお訪ねすると葉巻が金鵄に変つていた。

「煙草も配給になつて御不自由でしよう。」

「イヤお蔭で胃腸が丈夫になつたよ。」

色つやもよくなり肥えて居られる様であつた。

原爆投下の翌日、軍隊を病気除隊になつての帰りがけ、八月十日午後道尾駅で下車して大橋、岡町、松山、山里、浜口町一帯を彷徨する事三時間、計らずも足を踏み入れた処が爆心地帯であつた。大変気になる大学を目の前にしながら爆心の余りな光景に圧倒されて夕闇迫る頃山越しに一応田舎に退散。改めて九月四日、大雨の降る日衛生学教室の焼跡に立つた。大倉教授は？福田助教授は？内田君は？鬼気迫る光景の中で人一人見えず、誰に尋ねようもない。この日の夕刻やつと広馬場の高木病院に避難しておらるゝ古屋野先生にお会い出来た。御夫人はその三日前に、角尾学長は廿二日に亡くなられた事、大倉教授は教授室でそれと確認出来る白骨となつておられ收容したのであるが、福田先生の分はどうしても発見出来なかつた事等々。始めて当日とその後の惨害に就いて承わる。申上げる言葉も無かつた。

私が教室に居た頃の人で原爆の犠牲となられたのは大倉教授、福田助教授、内田君はずつと後輩であるが十九年度夏軍医予備員として久留米の連隊で一緒に苦労した間柄。原爆当時は助教授として悲運に際会された。

福田秀信先生は私より三年の先輩、巨大なる体に無類の善意を包んだこの人と六年間教室生活を共にして苦楽を分ちあつたのであつた。その講義は名調子。殊にラヂオ放送は手に入つたものであつた。大倉教授が超俗のお人柄であつたので多くの仕事が福田先生の方に振り向けられ、年から年中忙しい〳〵で寸暇もなく、嬉しそうに動かれた。八月九日の当日も何かの用件で教室外に出ておられたのであるまいか、古屋野先生とそんな風な話もいたした事であつた。既にそれから十年の歳月がすぎ去つた。この一文を草するために大倉教授のお嬢さんお二人、やつとの事で住所をさがし当てたのであるが先生御赴任当時、六才と八才のお嬢さんで毎週一回御家族の唾液をとりよせて肺炎菌の検査を続けた頃の印象しか無いのでどの様な令夫人となつて居られるや想像もつかない。そしてお母さん（大倉教授夫人）が廿七年五月に病歿なされた由を承わる。原爆以後の苦難の中でなくなられた事と想い、御見舞もいたさず今となつてはおわびの申様も無い。

（昭和卅年八月卅一日記）

大倉、福田兩先生の思い出

茅野真一

私が大倉教授、福田助教授の衞生学教室に居たのは、太平洋戦争は未だ始まらず、日支事変が始まつた前後で、日本と英米の国力の相違に気がつかない一般民衆は一等国と自負して居たが、大学の教室員の間では、軍医予備員志願の可否が論ぜられ、敗戦主義者が、まだ優勢だつた頃でした。今はすでに、何も彼も過去と云う霧の中に包まれ、茫漠として居ますが、其の中の処々が雲海に突出した山頂の様に多くの感慨を包蔵して私の脳裡に強く印象づけられて居ます。

大倉教授は葉巻に関しては耽溺者と云つて宜かつた。朝登学して自室に入られると直ちに葉巻をくわえて夕方御帰宅になる迄放されませんでした。大変静かな方で大低は自室に閉ぢこもつて読書をしていられましたが、寸時も葉巻は放されませんでした。吾々の実験の場に来られる途中の廊下でさえ葉巻無しのお姿をついぞ見かけたことはありません。或る日曜日の午後、遅れている自分の研究を取返えそうと、皆が帰つた研究室で独り実験をしていると、とこ〳〵やつて来られて「茅野君はチェリーを喫みますね、僕は御存知の様に外国で癖がついて葉巻を喫つているのだが、強過ぎて健康にも好くない様だし、不経済であるから紙巻きにしようと思つて之を購めてみたが、どうも喫めません。」と云われて数箱のチェリーを下さつたことがありました。

福田さんは、大柄な普通の人を今一廻りも大きくした様な体格の偉丈

夫で、友人の為めには寝食を忘れ東奔西走し友情を傾け尽される方でしたが、其の相手が自分程純情でない事をも又嘆かれる善人でした。墨で和紙に字を書く事が好きで、よく他人の履歴書を書いて居られました。又人事百般、諸行事等に就いて博識で誰も気付かぬ様な事を知って居られ、特に運動競技の記録を暗誦んじて居られるのには感心させられたものでした。ところがこの物識りの福田さんにも燈台下暗しとでも云うか、次の様な挿話があるのです。長崎の商業中心地では日本軍の南京入城を祝して提灯行列をやっていると云う夕でした。福田さんの発起肝入りで、大倉先生を除いた教室全員はサーバント室ですきやき会をしました。牛肉は一人前百匁で足るだろうかとの福田さんの相談に誰も答えないので百匁宛準備した所半分も食べず、すきやきに関する人間の食慾の限度を、福田さんも此の時初めて知られた様でした。

それから二十年の歳月が経ちました。実験道具、標本、書籍等々総ては大倉、福田両先生と共に一瞬の内に消失し、今一箇たりとも思い出の品はありません。

然し其の廃墟には現在長崎大学医学部衛生学教室が蘇り幾多貴重な業績を挙げて居られます事は同慶に堪えません。

尚今回記念の文集を編せられるとの事で、ささやかな思い出話を綴って、責めを塞ぎたいと思います。

東亜風土病研究所

当時の研究所は二教室に分れ病理学科教室に金子直教授、高山吉晴助手、細菌学科教室に青木義勇助教授（応召中）才津芳雄副手、その他の教室員として雇の平山富士子、岩永ヨシエ、傭人の草野チョカ、真田篤子、定夫の山口末三郎の諸氏が在籍していた。

被爆時の状況

金子教授は小使室の移築中金比羅山麓で、才津助手は大学近くの路上で、平山、草野、真田、山口の教室員は教室内で爆死。

故金子直教授の略歴

従五位勲四等医学博士、東亜風土病研究所員（教授）

明治三十三年九月三十日長崎県に生る
大正十四年三年九州帝国大学医学部卒業
大正十五年三月同大学助手に任ぜられ病理学を専攻す
昭和五年二月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十二年三月病理学研究のため欧米に留学同十四年七月帰朝す
昭和十六年一月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十七年十月陞敍高等官二等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い爆死玉に殉ず

主なる研究題目

結核諸病巣に於ける粘液形成、鍍銀性線維の形成或は発生に就いて